



藤木光明、ステップスギャラリー二度目の個展である。前回同様、水面を描いているのだが、その意識の変化が、向き合う姿勢が、作品の襞が格段と深くってきている。作品の襞とは何か。作品を描くという行為は、外にある事象を自己が見える姿として自己の外の事物に映し出すことであると想定すると、テクニックが不可欠となる。自己の中にだけある世界を外に表すということであると、果てしない想像力が必要となる。自己を突き詰め、色や形、モチーフの関連を説明できなければならない。過去に前例がない作品を生み出す場合の創造とは、計ることができない。それが美術の粋を超えてしまうことが多々あるだろうし、美術に留まることもある。技巧よりも想像力が上回るのが、現代美術の特徴といえるであろう。何ができなければ次に進めないというのは、それだけで一つの権威と化してしまう。ひたすらに想像力で宇宙を突き破ること。それが現代美術の襞である。

藤木はそのような襞を一つ越えたことになる。それと同時に、藤木は、抽象でも具象でもない他の美術へ向かおうとしているように、私には感じる。抽象と具象の区別とは何か。世の中に満ち溢れているものは全て具体的であり、その具体性を崩して抽象化したのが抽象画であると考えることができる。しかし、それは世の中を理路整然と考える近代の思考回路である。掌であろうと花卉でもいい、よくよく眺めてみよう。すると、全てが異様な抽象に感じてくる。つまり目の前に広がる世界が、具体か抽象は問題ではない。アーティストが世界をどのように実現し、見る者がその世界をどのように切り拓いていくのかが重要なのだ。藤木の今回の作品群の特徴は、サイズと共に、縦横の世界観が多様に展開している点にある。それぞれの作品はマトリクスを持つ変奏曲ではなく、独立した宇宙を構築している。多様な価値観を示す藤木の、次回の展示も楽しみだ。

